

II 病害虫発生子実事業

1 病害虫の発生経過概要および発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	並	並	早期水稲、普通期水稲とも発生程度は平年並であった。		
	いもち病 葉いもち	早期：並 普通期：並	早期：多 普通期：多	早期では、6月3半旬より発生が見られ、7月上旬の発生圃場率は75%、発病率は17%で、全般的に多発生であった。 普通期では6月6半旬より発生し、7月下旬より、り病性品種を中心に急激に病勢が進展した。8月中旬の発生圃場率は50%、発病率は19%と高かった。また、ずりこみや上位葉への進展もみられ多発生であった。	・生育期の低温、曇雨天	・育苗箱施肥及び本田期における薬剤散布
	いもち病 穂いもち	早期：並 普通期：並	早期：多 普通期：多	早期では、7月下旬より発生がみられ、8月下旬の発生圃場率63%、発病率は7%で全般的には多発生であった。 普通期では、8月5半旬より発生がみられ、10月上旬の発生圃場率は57%、発病率は7.5%で、多発生であった。	・穂ばらみ期～登熟期の天候不良	・出穂前の粒粒施肥 ・出穂期、穂ぞろい期および出穂後7～10日目の防除
	紋枯病	早期：並 普通期：並	並	早期では、7月1半旬より発生し、7月下旬の発生圃場率は79%、発病率は9%でやや多の発生であった。 普通期では、7月下旬より発生がみられ、その後一部で葉腐れ症状の圃場が認められた。9月上旬の発生圃場率は52%、発病率は7%であり、一部で上位葉鞘への進展がみられた。	・曇天、多雨による稲体の軟弱	・穂ばらみ期～出穂期にコブノメイガ、ウンカ類との同時防除
	ばか苗病	並	少	早期、普通期とも少発生であった。		・ベノミル番耕耕種に有効な種子消毒剤の使用
	白葉枯病	遅	多	早期では発生を認めなかった。 普通期では9月上旬より発生がみられ、9月下旬の発生圃場率は10%で、諫早、大村地区を中心とした県央地域での発生が多かった。	・生育期の曇天、長雨。 ・台風(断続的な豊米(6号[7/29]、7号[8/10]13号[9/3])。)	・県央の多発地区の一部で防除がなされた。
	もみ枯細裂病	遅	少	早期では発生を認めなかった。 普通期では極めてわずかな発生であった。	・出穂時期の低温	・一部穂いもちとの同時防除
	アザヒコバエ 萎縮病	並 並	並 やや少	越冬密度は平年並であった。第1世代成虫最盛期は6月3～4半旬、第2世代成虫最盛期は7月6半旬であった。発生時期、発生量は平年並みであった。 第1世代の保毒虫率は0.1%であった。 萎縮病の発生はやや少なかった。	・保毒虫率が低かった。	・箱施肥によりいもち病、ウンカ類等との同時防除 ・本田ではウンカ類との同時防除
	ヒメトビウカ 稲葉枯病	並 遅	少 少	ヒメトビウカの越冬密度は平年並であったが、第1世代幼虫の小葉圃場における生虫量はやや多かった。第2世代以降の発生量は少なかった。越冬世代成虫最盛期は3月5～6半旬、第1世代成虫最盛期は6月2～3半旬、第2世代成虫最盛期は7月2～3半旬で、発生時期は平年並であった。第1世代の保毒虫率は0.3%であった。 稲葉枯病は、7月下旬より発生がみられたが、発病率は低く、全般的には少発生であった。		・箱施肥によるウンカ類との同時防除
	ヒメロウカ	やや早	並	5月17日に初飛来。6月13日以降断続的に少飛来、6月22～24日に中飛来、7月2～4、14～17日に多飛来がみられた。飛来時期はやや早く、全体の飛来量は平年並みであった。		・育苗箱施肥による次世代増殖の抑制効果
	ヒメロウカ	やや早	並	セジロウンカとはほぼ同時期の飛来で飛来量は多かったが、株当たり寄生虫数は、8月下旬0.5頭、9月上旬0.2頭と平年並の発生であった。なお、7月下旬の短翅雌率は61%とやや高かった。	・飛来量がやや多かった。	・育苗箱施肥による次世代増殖の抑制効果 ・コブノメイガ等との同時防除
	コブノメイガ	並	やや多	6月15日に初飛来。7月2～4、14～17日に多飛来がみられた。その前後にも飛来が断続的にみられ、飛来量は多かった。 7月中旬より加害が目立ち始め、7月下旬には被害発生圃場率が90%を超え、被害率は、早期で34%、普通期で49%であった。8月中旬以降新葉の被害は少なくなった。 9月上旬の被害発生圃場率は42%、被害率は7%であった。	・断続的な飛来であった。 ・飛来量が多かった。 ・飛来次世代幼虫の防除不徹底 ・8月の低温・多雨により増殖抑制	・第1世代の防除はウンカ類との同時防除 ・第2世代の防除は紋枯病との同時防除

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	体ミドリカシ	並	並	越冬密度は平年並みであった。4月上旬には畦畔雑草で摂食活動がみられ、早期水稲では田植え直後から圃場侵入がみられた。5月下旬の被害発生圃場率は86%、株当り寄生虫数は0.12頭であった。普通期早植地帯では山間地などで被害が目立ったが、発生量は平年並であった。		・箱施肥による防除が主体
	斑点米カシ類	並	並	雑草地での発生量が多かったが、早期、普通期とも平年並の発生であった。早期では、8月上旬の発生圃場率が3%、20回すくい取りの平均値が0.4頭であった。普通期では9月上旬の発生圃場率が3%、20回すくい取りの平均値が0.03頭であった。		・出穂期～乳熟期に穂いもちとの同時防除
	カミコガイ	並	多	昨年秋期の発生が多く、越冬生貝も多かった。また、既発生地域において面積の増加がみられた、多発生であった。3月下旬以降水路での活動が認められ泉央地区では6月下旬の冠水により田植え直後の水稲が加害を受けた。	・冠水による用水路からの侵入	・貝、卵塊の捕殺 ・IBP粒剤の施用
ムギ類	さび病類	やや早	やや少	大麦の小さび病は3月下旬から、小麦の赤さび病は5月下旬から発生が見られたが、全般的にやや少の発生であった。その他のさび病類は発生を認めなかった。		・一部地域を除いて防除がほとんどされていない。
	うどんこ病	並	やや多	3月中旬から二条大麦に、4月上旬から小麦に発生、4月下旬以降二条大麦で一部に多発圃場がみられたが、全般的にやや多の発生であった。		
	赤かび病	やや早	並	5月中旬から発生、5月下旬以降小麦で一部に多発圃場が見られたが、全般的に平年並の発生であった。		
	絹萎縮病	並	並	3月下旬、大麦の発生圃場率は25%で、一部地域において多発圃場がみられたが、全般的に平年並の発生であった。小麦では発生を認めていない。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ジャガイモ	葉斑病	春作：並	春作：並	春作：全般に平年並の発生であった。		・種いも更新 ・アブラムシの防除
		秋作：並	秋作：並	秋作：10月下旬の発生圃場率10%、発病株率0.4%であった。		
	モザイク病	春作：並	春作：並	春作：5月上旬の発生圃場率6%、発病株率0.5%であった。		・種いも更新 ・アブラムシの防除
		秋作：並	秋作：並	秋作：全般に平年並の発生であった。		
	疫病	春作：やや早	春作：やや多	春作：4月下旬の発生圃場率は4%であったが、5月上旬には32%と発生が拡大し、やや多の発生であった。	・4月下旬～5月の曇雨天 ・10月下旬～11月上旬の曇雨天 ・11月の気温が平年より高く発生好適であった。	・生育後半の防除の不徹底
		秋作：並	秋作：やや多	秋作：10月中旬以降発生がみられ、11月上旬以降急増した。11月下旬には多発圃場もみられ、発病株率36%に達して、全般的にはやや多の発生であった。		
	アブラムシ類	春作：並	春作：並	春作：4月下旬以降増加し一部に多発圃場もみられ、5月下旬の発生圃場率9.2%、寄生株率4.2%であったが株当たり虫数はやや少なく全般には平年並の発生であった。		・アブラムシの種類を考慮した使用薬剤の選択
秋作：並		秋作：並	秋作：10月上旬以降発生が増加し、11月上旬の発生圃場率8.2%、寄生株率3.2%であったが株当たり虫数はやや少なく全般には平年並の発生であった。			
ゴキブリ科シロアリ	春作：並	春作：並	春作：5月上旬の発生圃場率13%、寄生株率0.4%であった。		・アブラムシ類との同時防除	
	秋作：並	秋作：並	秋作：10月上旬の発生圃場率10%、寄生株率0.1%であった。			
ジャガイモガ	春作：並	春作：並	春作：5月上旬の発生圃場率は10%、被害株率は0.6%であった。		・アブラムシ類との同時防除	
	秋作：並	秋作：やや少	秋作：10月上旬の発生圃場率は14%、被害株率は0.2%であった。			
食害性ヤガ類	春作：並	春作：やや少	春作：全般にやや少の発生であった。		・アブラムシ類との同時防除	
	秋作：やや遅	秋作：やや少	秋作：10月まで被害株率0.1%以下で推移した。11月以降ヨトウガが一部でやや多発したが、全般的にはやや少の発生であった。			
サツマイモ	イモキバガ	並	並	各地で発生したが、平年並みであった。		
	ナカジロシタバ	並	やや少	各地で発生したが、平年比やや少の発生であった。		
	ハスモンヨトウ	並	並多	各地で発生したが、平年並みであった。	・7月下旬から8月の断続	
大豆	葉斑病	並	やや少	平年よりやや少の発生であった。葉斑粒率は1.2%であった。		
	べと病	並	並	8月下旬より発生がみられ、一部に多発圃場が見られたが、全般的に平年並の発生であった。		
	葉斑病	やや早	多	7月下旬より発生がみられ、その後各地で発生した。10月上旬の発生圃場率は100%、発病株率は78%で、多発生であった。	・7月下旬から8月の断続降雨と台風7号(8/10)13号(9/3)による。	
	ハスモンヨトウ	やや早	やや少	7月下旬より白変葉がみられ、その後各地で発生した。白変葉の発生圃場率は9月上旬で19%、9月下旬で40%、株当たり寄生虫数は9月下旬で0.1頭と少なかった。	・7月の成虫飛来量は平年比やや多であったが、8月以降、平年並となった ・8月以降の長雨による抑制	・8月下旬の若齢期を主体に防除が実施された。
	鱗翅目幼虫類	並	やや少	9月下旬よりウワバ類の発生がみられたが、平年よりやや少なかった。		
	カミシ類	やや遅	やや少	9月下旬以降発生が見られ、10月上旬の寄生株率は0.6%、株当たり寄生虫数は0.05頭以下で、やや少の発生であった。		・ハスモンヨトウとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
カンキツ	そうか病	並	並	春葉での初発は4月20日に北有馬町で認め、平年並であった。その後の葉での発生は、7月上旬の発生圃場率は14%、発病率0.4%と平年並であった。果実での発生は6月上旬より認められ、梅雨期の降雨により増加した。しかし、一部には多発圃場がみられたが、8月上旬の発生圃場率は17%、発病率1.6%と平年並の発生であった。		・発芽期及び幼果期に防除
	かいよう病	やや遅	並	越冬病斑量は一部で多い圃場が認められ、平年よりやや多かった。春葉での初発は、4月19日に大村市で認めたが、平年よりやや遅かった。その後の葉での発生は、発生圃場率17%程度、発病率は0.4%以下で推移したが、8、9月の台風の影響により、9月上旬の発生圃場率は26%、発病率は0.5%と発生面積が拡大した。また、幼木、高接園等の夏秋梢において特にミカンハモグリガの加害痕への発病が多かった。果実での発生は7月上旬より認められたが、発病率は0.1%以下で推移し平年並の発生であった。	・台風7号(8月10日) 台風13号(9月3日)の来襲	・発芽前、梅雨期及び台風前後に防除
	黒点病	並	やや多	春期の枯れ枝の発生量は平年並であった。果実での発病は6月下旬より認められ、梅雨期間が長く降雨量、降雨日数とも多く、また8月に入っても曇雨天が続いたためやや多の発生となった。なお、9月下旬の発生圃場率は96%、発病率は52%と高かった。	・降雨量、降雨日数が多く、防除時期を失した。	・薬剤の残効を考慮した防除が実施された。
	マカガラムシ	やや遅	並	1齢幼虫の初発時期は、第1世代が5月中旬、第2世代は7月下旬と平年に比べやや遅かった。発生量はともに平年並であった。 県下全域で本虫に対する寄生蜂の寄生が認められている。		
	ミカンウシ	並	並	春先の発生は平年並で、7月上旬までは寄生率2~8%で推移した。7月下旬には21%と増加したが、防除や台風、曇雨天により9月上旬まで1~6%で推移した。しかし、9月下旬以降増加し、11月上旬の発生圃場率は57%、寄生率は23%と高かった。	・降雨量、降雨日数が多く、また台風が来襲したため増殖が抑制されたが、9月下旬以降は晴天が多く増殖した。	・一部の露地、施設において既存薬剤の効力低下がみられた。
	カミシ類	並	少	越冬成虫量は平年に比べ少なかった。8月のヒノキキゅう果における生息密度は低く、予察灯への飛来も少なかった。また、園への飛来や果実の被害もほとんど認めなかった。	・降雨量、降雨日数が多く、また台風が来襲したため増殖が抑制された。	・防除はほとんど実施されなかった。
	アブラムシ類	並	やや少	各地で発生がみられたが、全般にやや少ない発生であった。		
	キナンドクダマシ	並	並	発生量は、8月にやや減少したが全般に平年並であった。被害果は7月上旬より認められたが、9月下旬の被害果発生圃場率は64%、被害率は5%と平年並の発生であった。		・黒点病との同時防除 ・常発圃場では専用殺虫剤による防除が実施された。
ビワ	がんしゅ病	やや遅	並	春葉での初発は4月8日と平年より遅く、夏葉での初発は6月23日と平年並であった。発生量は春葉、夏葉とも平年並であった。		・芽かき、せん定後に防除
	灰斑病	並	やや多	春葉は平年並の発生であったが、夏葉では増加し、平年に比べやや多い発生であった。	・6~8月の長雨	・春葉及び夏葉伸長期に防除 ・登録薬剤が少ない。 ・イワアトハ防除の効力低下
	褐斑病	並	やや多	一部夏葉で発生の多い圃場が認められ、やや多の発生であった。		
	ハカシカイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		・がんしゅ病の防除時に合わせて、カルタップ剤が散布された。
ナシ	黒斑病	並	やや多	初発は4月28日で平年並であった。6月下旬から発生が増加し、8月下旬には発病率7.5%とやや多の発生であった。	・6~8月の長雨	・防除回数が増加した。
	黒星病	やや遅	並	初発は5月30日で平年に比べやや遅かった。6月下旬以降各地で発生がみられ、8月上旬の発生圃場率25%、発病率0.8%と平年並の発生であった。		・EBI剤等による防除が実施された。
	赤星病	並	並	初発は4月10日で平年並であった。5月上旬までは発生が少なかったが、中旬以降増加した。一部で多発圃場もみられたが発生量は平年並であった。		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(ナシ)	うどんこ病	並	やや多	7月下旬より発生を認め、その後9月上旬までは目立った増加はみられなかったが9月下旬に発生圃場率50%、発病葉率34%とやや多の発生となった。		・一部地帯で収穫後の防除不徹底
	ハダニ類	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		
	ハダニ類	やや早	並	6月上旬より発生を認め、9月下旬には一部で多発したが全般には平年並の発生であった。		
	カメムシ類	並	少	越冬成虫量は平年に比べ少なかった。幼果期から収穫期まで生育期間を通じて園への飛来及び加害はほとんど見られなかった。	・越冬成虫が少なかった。	
	アブラムシ類	並	やや少	寄生は4月上旬より認めたがその後の発生は少なく、5月下旬の発生圃場率42%、寄生新梢率18%と平年に比べやや少ない発生であった。ユキヤナギアブラムシとワタアブラムシが主であったが、ナシアブラムシの寄生もみられた。		
ブドウ	黒とう病	遅	並	平年より遅く、5月下旬より発生を認めた。その後多発圃場も認められたが7月下旬の発生圃場率38%、発病葉率6%と全般には平年並の発生であった。一部では台風被害後二次伸長した新梢への発病も見られた。	・4月の好天	
	べと病	並	やや多	6月の長雨により発生が増加し、7月下旬には発生圃場率67%、発病葉率11%と高く、やや多の発生であった。	・6~8月の長雨	・予防散布の不徹底
	うどんこ病	並	やや少	生育期間を通じて発生は少なく推移し、平年に比べやや少ない発生であった。		
	ハダニ類	並	やや多	梅雨入りまでの好天により第2世代成虫が多発し、果実への被害が多発した圃場が多くみられた。また、袋掛け後の穂軸及び果実への被害も多く、やや多の発生であった。	・降雨量、降雨日数が多く、防除時期を失した。	
茶	炭そ病	並	やや多	6月からの長雨により二番茶期以降発生が増加し、三番茶では一部被害を受けた。秋芽展葉後にも多発して平年に比べやや多い発生であった。	・降雨量、降雨日数が多かった。 ・葉剤を適期に散布できなかった。	
	もち病	並	やや多	5月下旬から例年より多い発生が認められ、その後も多発の傾向が続いた。秋芽への発生が多くみられ、やや多の発生であった。		
	輪斑病	並	やや多	二番茶、三番茶後に枝枯れがみられ、秋芽でも新梢の枯死症状が目立ち、平年に比べやや多い発生であった。		
	ハダニ類	やや遅	並	各世代とも予防灯への誘殺量は平年並であったが、発蛾最盛期は平年に比べやや遅く、長い傾向にあった。第三世代による巻葉の被害はやや少なかった。		
	ハダニ類	やや遅	並	6月以降8月中旬までは巻葉が散見される程度であった。8月下旬から多発圃場が散見され、秋芽にも巻葉がみられたが、全般には平年並の発生であった。		
	ハダニ類	並	やや少	5月までは平年並の寄生密度で推移していたが、6月以降の低温多雨により減少し、全般にやや少の発生であった。		
	ハダニ類	並	並	7、8月にやや減少したが、全般に平年並の発生量であった。		
	ハダニ類	並	やや少	春先から寄生密度が高かったものの、二番茶期以降は低温多雨により減少し、低い密度で推移した。10月に入りやや増加したが、全般に平年に比べやや少ない発生であった。		
	ハダニ類	やや遅	やや少	越冬虫は多かったが、一番茶期後の防除、第二世代幼虫期前後の長雨によって減少し、やや少ない発生となった。	・6~8月の長雨、低温	・多発圃場における更新後の葉剤散布の徹底

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春トマト (平成4年 植付)	モザイク病	やや早	並	3月上旬、一部の圃場で発生し、発病率は0.02%であった。		・土壌消毒 ・育苗期から定植期のアブラムシ防除
	疫病	並	やや少	1月下旬、一部圃場で発生を認めたが、全般にはやや少の発生であった。		・初期防除の徹底
	葉かび病	並	やや多	3月上旬まで発病率3%以下で推移したが、3月下旬以降増加し、3月下旬の発病率10%とやや多の発生であった。		・発病初期からの薬剤散布
	灰色かび病	並	並	1月下旬の発病率は0.1%、5月下旬は0.3%であった。		・薬剤抗性菌株を念頭に おいた薬剤散布 ・被青果の除去
	アブラムシ類	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	コナジラミ類	やや早	並	生育初期の11月上旬はやや多の発生であったが、11月下旬以降減少し、全般的には平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		
冬春トマト (平成5年 植付)	モザイク病	並	並	3月下旬一部の圃場で発生を認めた。		
	疫病	並	やや少	12月中旬と3月下旬に一部の圃場で発生を認めたが、やや少の発生であった。		
	葉かび病	並	やや多	12月中旬に発病率10%と増加し、その後もやや多で推移した。	・11月の曇天 ・暖冬で経過した	
	灰色かび病	並	並	1月下旬の発病率は0.1%、3月上旬は0.2%であった。		
	アブラムシ類	並	並	平年並の発生であった。		
	コナジラミ類	並	並	平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		
冬春きゅうり (平成4年 植付)	モザイク病	並	やや少	全般にやや少ない発生であった。		・アブラムシの防除
	斑点細菌病	並	やや少	全般にやや少ない発生であった。		
	べと病	並	やや多	12月中旬の発病率は5.8%、3月下旬は6.8%であった。	・12月、3月中下旬の曇天	・発生初期からの薬剤散布
	根腐病	並	並	3月下旬の発生圃場率は13%、発病率1.7%であった。		
	うどんこ病	並	並	12月中旬の発病率は5.4%、4月上旬は10%であった。		
	灰色かび病	並	並	12月中旬の発病率は0.3%、2月下旬は2.8%と増加したが全般に平年並の発生であった。		・薬剤抗性菌株
	腐核病	並	並	12月中旬の発病率は1.0%と増加したが、3月上旬は0.1%と平年並の発生であった。		・被青果の除去
	アブラムシ類	並	並	1月下旬まで寄生率0.04%以下で推移した。2月下旬よりやや増加したが全般的には平年並の発生であった。		
	コナジラミ類	やや早	並	3月下旬の発生圃場率29%、寄生率11%であったがその後減少し、全般的にはやや少の発生であった。		・定植時の殺菌剤施用 ・初期防除
	コナジラミ類	やや早	並	11月下旬の寄生率12%とやや多の発生であったが、12月以降減少し全般には平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		
冬春きゅうり (平成5年 植付)	モザイク病	並	やや少	やや少の発生であった。		
	斑点細菌病	並	やや少	12月中旬の発生圃場率7%、発病率0.4%であった。		
	べと病	並	やや多	12月中旬の発病率は4.7%、3月下旬は10.4%であった。	・11月の曇天 ・暖冬で経過した	
	根腐病	並	並	12月中旬より発生し2月下旬の発生圃場率6%、発病率2.2%であった。		
	うどんこ病	並	並	12月中旬の発病率は5.4%、2月下旬は4.2%であった。		
	灰色かび病	並	並	12月中旬の発病率0.1%、3月下旬は0.4%であった。		
	腐核病	並	並	12月中旬の発病率0.8%と増加したが、3月には減少した。		
	アブラムシ類	並	並	2月下旬まで寄生率0.02%以下で推移した。		
	コナジラミ類	並	やや少	3月下旬まで寄生率2%以下で推移した。		
	コナジラミ類	並	並	平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
メロン (春夏作)	モザイク病	並	並	一部の圃場で発生が見られたが、全般的には平年並の発生であった。		・寒冷紗によるアブラムシの飛来防止と薬剤散布
	えそ斑点病	並	並	6月下旬、一部の圃場で発生した。		・土壌消毒
	斑点細菌病	並	やや少	5月下旬の発生圃場率は7%、発病率は0.3%と増加したが全般的にはやや少であった。		
	べと病	並	並	全般に平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	やや多	5月下旬の発病率は4.4%であった。		・葉面粘着剤の発生回避を念頭においた薬剤散布
	つる枯病	並	並	4月下旬の発生圃場率6%、発病率0.1%であった。		
	アブラムシ類	並	やや多	3月下旬より増加し、5月下旬の発生圃場率67%、寄生率18%とやや多の発生であった。	・4月の晴天	
	ミキバゲミダ	並	並	寄生率0.5%以下で推移し、平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
すいか	つる枯病	並	並	全般に平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	炭そ病	並	やや多	6月下旬の発病率は3.8%とやや多の発生であった。7月には、さらに病勢が進んだ。	・5~7月の曇天 ・7月の低温多湿	
	ハダニ類	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	4月より寄生率2%以下で推移し、6月上旬には寄生率13%と増加したが全般には平年並の発生であった。		
春はくさい (平成4~5年植付)	根こぶ病	並	並	前年並の発生であった。		・定植時の土壌施肥による防除の実施
	コナガ	並	並	全般に平年並の発生であった。		・葉面抵抗性対策のための輪番散布
秋冬はくさい (平成4年播種)	モザイク病	並	並	11月下旬の発生圃場率は17%、発病率は1.0%であった。		・生育初期のアブラムシ防除の実施
	軟腐病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	べと病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	白腐病	並	やや少	11月下旬発生を認めたが、全般にやや少の発生であった。		
	黒斑病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	寄生率は11月上旬21%、1月下旬25%と平年並で推移した。		
	コナガ	並	並	全般に平年並の発生であった。		・葉面抵抗性対策のための輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	10月上旬の寄生率は1.4%と平年並の発生であった。		
秋冬はくさい (平成5年播種)	モザイク病	並	並	11月下旬の発生圃場率は9%、発病率は0.02%であった。		・生育初期のアブラムシ防除の実施
	軟腐病	並	並	11月上旬の発生圃場率は25%、発病率は3.3%であった。		
	べと病	並	並	12月中旬の発生圃場率は44%、発病率は1.8%であった。		
	白腐病	並	並	12月中旬の発生圃場率は44%、発病率は2.7%であった。		
	黒斑病	並	並	11月下旬の発生圃場率は27%、発病率は7.3%であった。		
	アブラムシ類	並	並	10月~1月の寄生率は3~11%で推移した。		
	コナガ	並	並	9月~1月の寄生率は0.4~16.6%で推移した。		・葉面抵抗性対策のための輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	全般に平年並の発生であった。		
冬キャベツ (平成4年植付)	黒腐病	並	並	10月下旬より発生したが、全般に平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	黒根病	並	並	1月下旬に発生が増加したが、その後、発病率は0.3%以下で推移し、全般に平年並の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬キャベツ (平成4年 植付)	アブラムシ類	並	並	10月下旬の寄生株率は2.7%、全般に平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除の実施
	コナガ	並	並	10月下旬の寄生株率は4.2%、株当たり虫数は1.1頭と平年並の発生であった。		・葉剤抵抗性対策のための輪播散布
	モンシロチョウ	並	やや多	10月下旬の発生圃場率4.2%、寄生株率1.2%とやや多の発生であった。		・コナガとの同時防除の実施
冬キャベツ (平成5年 植付)	黒腐病	並	並	一部多発圃場がみられるが、11月下旬の発生圃場率は3.0%、発病株率は8%であった。		
	菌核病	並	並	一部多発圃場がみられるが、11月下旬の発生圃場率は3.0%、発病株率は0.4%であった。		
	アブラムシ類	並	並	9月～2月の寄生株率は0.2～13.7%で推移した。		・コナガとの同時防除の実施
	コナガ	並	並	9月～2月の寄生株率は1.3～16.1%で推移した。		・葉剤抵抗性対策のための輪播散布
	ヨトウムシ類	並	並	ヨトウガが一部多発生したが、その他の種は全般に平年並である。		・コナガとの同時防除の実施
	モンシロチョウ	並	並	9月～2月の寄生株率は2%以下で推移した。		・コナガとの同時防除の実施
たまねぎ (平成4年 植付)	白色腐病	並	並	2月下旬より一部多発圃場も見られたが、全般に発病株率は2%以下で推移し、平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	べと病	並	並	3月より発生がみられ、全般に発病株率1%以下で推移し、平年並の発生であった。		
	ボトリウムによる葉枯症	並	やや少	1月より発生がみられたが、4月下旬の発病株率2%とやや少の発生であった。		
	ネギアザミウマ	並	やや多	4月下旬の寄生株率8.2%とやや多の発生であった。		
たまねぎ (平成5年 植付)	白色腐病	並	並	2月下旬より発生し、3月下旬の発生圃場率は2.2%、発病株率は1.4%であった。		
	べと病	並	やや少	3月下旬の調査でまだ発生を認めない。		
	ボトリウムによる葉枯症	並	やや少	3月下旬の発生圃場率は3.2%、発病株率は1.1%であった。		
	ネギアザミウマ	並	並	11～3月の寄生株率は2.7～14.3%で推移した。		
冬にんじん (平成4年 播種)	黒葉枯病	並	並	11月上旬の発生圃場率は2.3%、発病株率は0.9%と平年並の発生であった。		
	うどんこ病	並	やや多	11月より各地で発生し、多発圃場がみられ、11月下旬の発生圃場率は8.7%、発病株率は4.7%とやや多の発生であった。	・10月～11月の乾燥	
冬にんじん (平成5年 播種)	黒葉枯病	並	並	9月下旬より発生を認め、11月下旬の発生圃場率は2.7%、発病株率は1.1%であった。		
	うどんこ病	並	やや少	11月下旬の発生圃場率は7%、発病株率は0.1%で、1月下旬の発生圃場率は7%、発病株率は0.3%であった。		
冬レタス (平成4年 植付)	灰色かび病	並	並	12月中旬の発病株率は0.1%と平年並の発生であった。		
	菌核病	並	並	2月下旬の発病株率は0.3%と平年並の発生であった。		
	斑点細菌病	並	並	全般に平年並の発生であった。		
冬レタス (平成5年 植付)	灰色かび病	並	並	12月中旬の発生圃場率は10%、発病株率は0.03%であった。		
	菌核病	並	やや多	12月中旬の発生圃場率は50%、発病株率は1%であった。	・10月下旬～11月の曇天	
	斑点細菌病	並	並	11月下旬の発生圃場率は11%、発病株率は2.2%であった。		
	腐敗病	やや早	やや多	10月中旬より発生を確認し、10月下旬の発生圃場率は2.2%、発病株率は1.6%で、早出しレタスで多発生した。	・9月中旬～10月上旬の降雨	
いちご (平成4年 植付)	炭そ病	並	並	10月下旬の <i>Gliocleria cingulata</i> による炭そ病の発生圃場率は1.1%、発病株率は0.2%であった。 育苗期の <i>Colletotrichum acutatum</i> による炭そ病は前年発生した地域で前年並に発生した。		・育苗期の薬剤散布の実施
	萎黄病	並	並	3月に一部圃場で発生を確認したが、全般に平年並の発生であった。		・薬剤ならびに太陽熱による土壌消毒の実施

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
いちご (平成4年 植付)	うどんこ病	やや早	多	育苗期から多発し、定植後も9月下旬から発生し、11月下旬の発病率は0.9%、3月下旬は2.3%と多の発生であった。	・育苗期の多発 ・株冷、夜冷栽培の増加 ・本圃への罹病苗の持ち込み	・主としてEBI剤による防除の実施
	灰色かび病	並	並	12月より発生した、発病率は1%以下で推移し、平年並の発生であった。		・葉際毒性対策のための輪灌散布
	アブラムシ類	並	並	11月下旬の発生圃場率は19%、寄生株率は8.6%と平年並の発生であった。		
	ハダニ類	並	やや多	10月下旬に寄生株率14%と増加し、その後も全般にやや多の発生であった。	・10~11月の乾燥	
	ハスモンヨトウ	並	並	定植直後から発生し、12月までの被害株率は4~7%で推移し、平年並の発生であった。		
いちご (平成5年 植付)	炭そ病	並	やや多	<i>Glomeria cingulata</i> による炭そ病は、育苗期から全般にやや多の発生で、定植後も萎縮症状を示す株がみられた。 <i>Colletotrichum acutatum</i> による炭そ病は既発生地での多発生した。	・7~8月の降雨	
	萎黄病	並	並	全般に並の発生であった。		・葉際ならびに人間熱による土壌消毒の実施
	うどんこ病	やや早	多	育苗期から発生し、5月下旬の発生圃場率81%、発病株率32%で8月上旬の発生圃場率50%、発病株率26%と多の発生であった。 定植後も9月から発生し、10月下旬の発生圃場率25%、発病株率1.4%、11月下旬の発生圃場率48%、発病株率7%、発病率0.7%と多の発生であった。 その後、1月以降は発病率は0.4以下で推移し、やや多の発生であった。	・前作圃場での多発 ・7~8月の低温 ・育苗期の多発 ・株冷、夜冷栽培の増加 ・本圃への罹病苗の持ち込み	・葉際毒性対策のための輪灌散布
	灰色かび病	並	並	11月下旬より発生し、全般に発病率は0.3以下で推移し、並の発生であった。		・葉際毒性対策のための輪灌散布
	アブラムシ類	並	並	10月~3月の寄生株率は1~4%で推移した。		
	ハダニ類	並	やや多	一部多発圃場がみられ、10月~3月の寄生株率は5~15%で推移し、やや多の発生である。		・育苗期からの葉剤散布
	ハスモンヨトウ	並	並	定植直後から発生し、被害株率は1%前後で推移した。		
しょうが	モザイク病	並	並	一部の圃場で発生が見られたが、全般的に平年並の発生であった。		
	根茎腐敗病	並	並	全般に平年並の発生であった。		・定植前の土壌消毒 ・発病後の粒剤施用
	白星病	並	やや少	全般的にやや少であった。		
	紋枯病	並	やや少	全般的にやや少であった。		
	メイガ類	並	並	9月下旬の被害株率は1.8%と平年並の発生であった。		